

貴志俊彦・川島真・孫安石編『戦争・ラジオ・記憶』

(勉誠出版、2006年)

西 村 正 男

最近、東アジアのメディア史研究が盛んである。評者自身も、中国文学を専門としているが近年レコードというメディアに関心を持つようになり、中国のレコード史をめぐる研究動向に注目している。日本のレコード文化研究は、かねてから在野の蒐集家等により資料が整理され、また音楽学者や社会学者により文化史的な考察が行われてきたのだが、最近では東アジアの他の諸地域においても資料が掘り起こされ、レコード文化史研究が深化しつつあることに気づかされた。台湾では『跳舞時代』(2003)という日本統治下の流行歌をめぐるドキュメンタリー映画が話題を呼んだのも記憶に新しいところである。また2006年には、日本コロムビアの「外地録音」をめぐる韓国、台湾、日本のレコード史研究者が集うシンポジウムも開催されている。様々な国や地域の、音楽学、文学、演劇研究、歴史学、社会学など様々な分野の研究者が、レコードというメディアに注目しているのである。

レコード以外のメディアに対する研究に眼を転じれば、戦前日本・東アジアにおけ

る新聞、出版、通信社、ラジオ、映画等様々なメディアについての論考を集めたものとして山本武利責任編集『メディアの中の「帝国」』(岩波講座「帝国」日本の学知第4巻)岩波書店、2006年も出版されており、東アジアのメディア史に対する関心が高まりつつあることが窺える。

このような状況の下、先の『メディアの中の「帝国」』とほぼ同時に、ラジオというメディアに的を絞った『戦争・ラジオ・記憶』が出版された。これは、『アジア遊学』No.54(特集「メディアとプロパガンダ」)のラジオに関する部分を基にして、新たな論考、書籍紹介、資料紹介と共に再構成したものであり、ラジオという20世紀の新しいメディアが中国・日本を中心とする東アジアにおいてどのように機能したのか、様々な角度から探ろうとした試みである。

本書の構成は、以下のようなものである。第I部は「戦争とラジオ」と題されている。以下に目次を記す。

・佐藤卓己「ラジオ文明とファシスト的公共性」

- ・竹山昭子「天皇報道とラジオ」
- ・貴志俊彦「東アジアにおける『電波戦争』の諸相」
- ・孫 安石「日中戦争と上海の日本語放送」
- ・貴志俊彦「中国奥地の日本人捕虜と日本語放送」
- ・貴志俊彦「中華民国の『抗戦教育』とラジオ・映画」

第Ⅱ部は、「ラジオと「帝国」」と題されている。同様に目次を記す。

- ・川島 真「満洲国とラジオ」
- ・李 承機「ラジオ放送と植民地台湾の大衆文化」
- ・金 栄熙「植民地時期朝鮮におけるラジオ放送の出現と聴取者」
- ・上田崇仁「朝鮮でラジオは何を教えたのか」
- ・川島 真「戦後台湾の対外ラジオ放送政策」
- ・小林聡明「ソ連軍占領期北朝鮮におけるラジオの成立」

第Ⅰ部が主として満洲事変から日中戦争へ至る時期の日本と中国のラジオ放送を対象としているのに対し、この第Ⅱ部では日本の植民地であった台湾及び朝鮮、さらには日本の傀儡政権・満洲国のラジオ放送が扱われている。

第Ⅲ部は「ラジオ研究著作シリーズ—— 自著・他著を語る」と題され、ラジオ史に関連する研究書について、著者自身あるいは他の研究者がコメント・書評を記している。第Ⅳ部は「ラジオ研究のための資料紹

介」として日本国内及び中国大陸・台湾の各博物館・資料館などを紹介している。

本書の骨幹をなすのが、論考を収めた第Ⅰ部と第Ⅱ部ということになるだろうが、その中でも特に編者の三人の活躍が目立つ。貴志は「東アジアにおける『電波戦争』の諸相」、「中国奥地の日本人捕虜と日本語放送」、「中華民国の『抗戦教育』とラジオ・映画」の三篇を執筆し、孫は「日中戦争と上海の日本語放送」一篇執筆に加え翻訳一篇、川島は「満洲国とラジオ」、「戦後台湾の対外ラジオ放送政策」の二篇を執筆している。ここでは、まずこの三者の論考の内容から確認したい。

貴志の論考は、第Ⅰ部に集中している。「東アジアにおける『電波戦争』の諸相」では、満洲事変から日中戦争期にかけての日中両国のラジオ政策の辿った道程を、中国大陸・台湾の档案資料や日本の公文書・出版物から綿密に追跡したものである。「中国奥地の日本人捕虜と日本語放送」では抗日戦下の中国における長谷川テル・鹿地亘・青山和夫ら（以上は国民党統治区）及び延安の日本語放送の沿革について、やはり档案資料などに基づきながら詳述している。「中華民国の『抗戦教育』とラジオ・映画」では1930年代から日中戦争までのラジオや映画を用いた「電化教育」の変遷とその困難が、やはり中国大陸の档案資料に拠って詳述される。

孫の論考「日中戦争と上海の日本語放送」は、1936年に開始した上海の日本語放送が

日中戦争を機に日本側の戦争宣伝の役割をも担っていったことを、外務省外交史料館や通信総合博物館などにある史料に拠って論じている。新しい史料を綿密に掘り起こすことにより、ラジオ政策の歴史を築き上げようとする姿勢は、貴志とも共通するものである。

川島の「満洲国とラジオ」は、「満洲国」におけるラジオ政策、聴取者獲得方策などの道程を、雑誌『電電』『放送』等から明らかにしようとしている（なお、この論考は先述の『メディアの中の「帝国」』にも収められている）。もう一篇の「戦後台湾の対外ラジオ放送政策」は、台湾の档案資料に依拠しながら、国際関係の中で台湾の中華民国政府が執った対外ラジオ放送政策を明らかにしようとするものである。

以上の三者の論考は、いずれも綿密な史料調査に基づいて、東アジア、特に中国語圏のラジオ政策史を構築しようとするものといえよう。これらの文章からは編者たちの、一次史料を繋ぎ合わせてラジオ史を構築していくことの喜びが伝わってくる（第IV部では、各博物館・档案館に収められている史料について解説が記されていて、編者や他の執筆者たちが利用した史料を読者が利用する際の手引きとなるだろう）。

本書の意義としては、これらの文章に代表されるように、これまで完全には明らかにされてこなかった東アジアのラジオ政策史を構築したことであろう。しかしながら、評者は本書を通読して若干の疑問点を感じ

ざるを得なかった。以下にその疑問点を記したい。

評者が感じたいちばん大きな疑問は、本書の標題と内容の齟齬である。『戦争・ラジオ・記憶』という標題であるが、「記憶」について記されている内容が乏しすぎるのではないだろうか。先ほど触れた三人の編者自身の論考は、ほとんどすべて政府によるラジオ政策に焦点が当てられており、時折放送の内容に言及されることがあっても、聴取者のラジオ放送の受容のあり方に焦点が当てられることはないのである。唯一川島の「満洲国とラジオ」において「リスナーの反応」についての記述があるが、それも文化史の上でどのような意味を持つのかの分析はなされないままである。従って本書全体として、ラジオというメディアが東アジアの文化に対してどのような役割を果たしたのかが不鮮明なままになってしまったことは否めない。

もっとも、巻頭論文である佐藤卓己「ラジオ文明とファシスト的公共性」では、「ラジオの時代」においてラジオが大衆的で参加的なメディアとして人々を引きつけ、「ファシスト的公共性（圏）」の中で世論形成が行われることを指摘していて、一つのラジオ文化史観を提起している。この論文が巻頭に置かれているだけに、他の論考においてこのような問題意識が共有されていないことはやや残念であった。

その他、編者以外の執筆者の論考には、聴取者によるラジオ放送の受容や、（単に

宣伝政策に還元されないような) 大衆文化の形成に言及しているものも見受けられる。第Ⅱ部の李承機「ラジオ放送と植民地台湾の大衆文化」、金榮熙「植民地時期朝鮮におけるラジオ放送の出現と聴取者」が、それである。特に李論文は、台湾流行歌の誕生とラジオ・レコード・印刷メディアの広告の相関関係を浮き彫りにしており、たいへん興味深く読んだ。ただ、本書全体としては、このような聴取者の受容に対する関心が弱く、題名の「記憶」から乖離していることは否めないだろう。编者たちが序言に「リスナーの問題は依然として課題としている」「リスナーがラジオ放送をどのように捉えたのかについては、まだ十分に明らかにできていない」と述べておりである。

もう一つの疑問点としては、用語の問題を挙げておきたい。中国大陸や台湾の機構名などを記す際の書記法が統一されていないように見受けられ、読者に混乱をもたらしかねないように感じた。例えば、「放送」を表す中国語「廣播」は、機構名等に用いられる場合もすべて「放送」と訳されているようであるが、他の単語は中国語のままにされている。具体的には、「中央放送無線管理処」(37頁)、「各省市実施放送教育弁法」(95頁)、「映画教育巡廻施教隊」(107頁)等である。「放送」を「廣播」と訳し「電影」を「映画」と訳したのは恐らく中国語を解さない読者のために日本語としての分かりやすさを優先しようとしたの

であろうが、このままでは日本語としても不自然なものもあり、また読者が本書の内容について自分で調査する際にも元の中国語が記されていなければ不便であろう。例えば、すべて分かりやすい日本語に訳した上で、巻末に日中対照表のようなものをつけるなどということはできなかつたらうか。また、先述の金論文で、植民地時期朝鮮の人々や言語を「韓国人」「韓国語」と呼称しているが、日本の植民地支配下では「韓国」という国は存在しなかったわけで、違和感を感じてしまう(「朝鮮語」「朝鮮人」または「韓語」「韓人」であれば理解できる)。韓国ではこのような呼称をすることは普通のことなのだろうか。

また、無い物ねだりになるかも知れないが、编者たちがせっかく詳しい資料調査をしているので、もう少し整理した形で資料を提示して欲しかったとも感じている。例えば、それぞれの地域におけるラジオ局名、出力数、沿革、番組表などはどのようなものであるか、あるいはどの資料にアクセスすれば入手できるのか、あるいはどこまで現在明らかになっているのか等々、一覧表にして付してもらえれば、本書の価値はなお高まったであろう。

言及できなかった文章もたくさんあり、他にも興味深かった点や疑問点はいくつかあるのだが、最後に一つだけ触れておく。第Ⅲ部の「ラジオ研究著作シリーズ——自著・他著を語る」は読み応えのあるものが少なくなかったが、須藤瑞代によるジョー

ジ・オーウェル『戦争とラジオ——BBC時代』の書評中に中国の著名な作家・ジャーナリストである蕭乾の名前を見いだしたのは、中国文学を専門分野とする評者にとっては不意打ちであった。確かに蕭乾の自伝『未帯地図的旅人』（邦訳は『地図を持たない旅人—ある中国知識人の選択』上・下、丸山他訳、花伝社1992）の中にもジョージ・オーウェルの名は二度ほど見受けられるが、記述はそれほど詳しくない。おそらく同書に収められたオーウェルの蕭乾宛書簡は、蕭乾研究にとっても、また中国人作家・ジャーナリストと英国人作家のメデイ

アをめぐる交流という視点からも、興味深い題材となるのではないだろうか。

本書に対してはいくつか不満も述べてきたが、それは東アジアのラジオ史にとって研究すべき事柄がまだ多く残されているということに他ならず、本書が、後に続くべき東アジアラジオ史研究に対して先駆的な、あるいはたたき台的な役割を果たしてくれたことは高く評価したいと思う。「序言」の末尾で編者たちが読者に研鑽を促しているように、本書の続きは我々読者が受け継がなければならないのだ。

貴志俊彦・川島真・孫安石 編

『戦争・ラジオ・記憶』

ISBN：4585053506

360P A5判

勉誠出版、(2006-3-20出版)

(NISHIMURA Masao)